鳴海ヶ丘会々報

発　行
宮崎県立高鍋高等学校
同窓会

宮崎県児湯郡高鍋町
大字北高鍋４２６２
ＴＥＬ　0983・23・0005
ＦＡＸ　0983・23・5096

平成20年度
高鍋高校ＯＢ祭

特別記念講演会　乙武洋匡氏
特別ゲスト　桑田真澄氏

ＯＢ祭実行委員会事務局長　**野中康弘**

今年度のＯＢ祭では、「五体不満足」の著書で有名な乙武洋匡氏を講師に招き、『チャレンジ精神』と題してご講演をいただきました。

やりがいを感じておられたスポーツライターという職を離れて現在の小学校教師の道に進まれた理由について、少年少女が被害者、そして加害者でもあった長崎県児童殺傷事件に対する思いを挙げられました。この事件に関する報道を見て、『子どもが育っていくということに対して、もっと大人が責任を持たなければいけないのではないか。』ということを強く感じられたそうです。そして、ご自身の少年時代を振り返った時に、自分は周りの大人に恵まれていたということを改めて感じ、その感謝の気持ち、そしてこれまで自分が受けた恩を次の世代の子供たちに返していく番ではないかという思いから教育という分野で子供たちのために自分の力を尽くしていきたいと話されました。

教師として日々子供たちと接する中で、今の子供たちはあきらめが早いということを強く感じると話されました。ご自身は昔から、「まずやってみる。」「だめだったら方法を変えてやってみる。」それでもだめだったら「もう一回くらい違う方法でやってみる。」という姿勢で物事に取り組んできたので、やる前から「できない。」というセリフを口にする子供たちに対してもどかしい思いを感じているとのことでした。

中学でバスケットボール部、高校でアメリカンフットボール部に入り、二十代前半で運転免許やスキューバーダイビングの免許を取り、そして今回の小学校教師へのチャレンジ等、周りからなぜそんなに新しいことに次々とチャレンジするのかと聞かれる度に、やりたいことがあるのに「なぜそんなにチャレンジしないのか？」と逆に聞いてみたくなると思っておられるそうです。まさに『チャレンジ精神』の塊のような人だと感じました。そして、ご自身が障がい者として生まれてきて、ひとつだけ肝に銘じてきたことは『この体を言い訳にはしたくない。』ということだと話されました。『人間は基本的に弱く、やりたいことがあっても、少しむずかしい局面を迎えるとすぐに言い訳をさがしてしまうものである。年齢や性別、生活環境等言い訳はすぐに見つかる。言い訳を探すことよりも、その壁を向こう側に乗り越える新しい手段、新しいやり方を見つけることがよっぽど前向きだし、充実感が待っている。』ということを教えていただきました。今後の人生をもっと前向きに生きてみようという気にさせる大変素晴らしい講演でした。

続いて、元巨人軍の桑田真澄氏をゲストに迎えて、乙武氏との特別対談が行われました。これまで桑田氏に対してストイックなイメージを持っていましたが、大変ユーモアに溢れた方で、楽しい雰囲気の中で対談が進みました。落ちこぼれだった小学校時代、努力することの楽しさを知った中学校時代、そして自信満々で入学した高校で清原和博氏と出会い、清原氏や上級生の野球のレベルの凄さにコンプレックスを初めて感じたということ等についてお話をしていただきました。そして野球に対する自信を失った時に、精神力の大切さ、また、練習量や投球術のトータルでがんばっていこうということに気づかせてくれたのが清原氏の存在だったということでした。桑田氏が引退を決意した時に、プロとして最後のボールを投げる相手は清原氏だと思っていたという話、そして度重なるケガからの復活を果たし、自信を持って一軍にあがるために、桑田氏の魂の入ったボール打たせてくれと願った清原氏の話を聞いて、高校時代の出会いから二十数年の時が経っても変わらないお二人の友情の強さ、深さというものを感じました。まさに、今回のＯＢ祭のテーマである『出会い～そして　永遠の友情へ』にふさわしいお話を聞かせていただきました。

超満員の高鍋町中央公民館

関西支部報告

毎年七月に開催されていた関西高鍋高校同窓会は、事務局の要望に応えて頂き、今年は八月三日（日）に開かれた。（十二時～道頓堀ホテル）県人会副会長他多くの来賓の方々の出席を得て、いつもより多い百十余名の参加で例年以上に盛大であった。地元宮崎からは、岩岡同窓会長、河野校長はじめ、石田ラグビー部ＯＢ会長、今年度のＯＢ祭実行委員長染山氏以下六名の役員が出席し、大歓迎を受けた。

特筆すべきは、今年は関西在住のＯＢ祭担当学年の同窓生が八名も参加したこと。一人は広島からもわざわざこの会に合わせて出席してくれ、久しぶりの再会を楽しめて旧交を温めることができた。緑色のラガーシャツ（群団）の勇姿がひときわ目立つ会となった。バザーや抽選会の品々も豊かで豪華賞品に感嘆の声をあげる方々も多かった。

来年からもＯＢ祭担当学年に呼びかけて、若い人達に積極的に参加してもらい、同窓会の若返りを図っていきたいとの声が飛びかった。在京同窓会で実現している、この方式は、他の支部でも大いに参考となりそうだ。

（藤本事務局長）

14名が揃ったH20年度ＯＢ会実行委員会

在京支部報告

七月十九日（土）に東京大手町の「サンケイプラザ」四Ｆホールにて、第四十一回在京同窓会総会・懇親会が開催されました。会には約二百五十名の方が参加され、大いに盛り上がりました。

会はまず、総会からスタートし、中野会長の挨拶の後、児玉事務局長より平成十八年、十九年度の事業報告及び決算報告が行われました。次期会長選任には、満場一致を持って、中野会長の留任が決定しました。

第二部のフォーラムでは、大東文化大学副学長の押川典昭氏（昭和四十一年卒）から「インドネシア文学について」公演していただき、二人目として、フランス料理モナリザ総料理長の河野透氏（昭和五十一年卒）から「世界のトップシェフをめざして」の公演をしていただきました。

第三部としまして、懇親会を開催し、現高鍋高校校長の河野包氏、鳴海ヶ丘会会長の岩岡保宏氏よりご挨拶していただきました。懇親会では即売会もあり、その他抽選会、前年のＯＢ祭実行委員長の小泉氏から報告と御礼、本年度実行委員長の染山氏より開催概要並びに協賛品ご協力のお願いがありました。会の締めくくりとしまして、参加者全員で応援歌を斉唱し、会は幕を閉じました。（在京支部　昭和五十九年卒　理事　永田　学）

250名揃っての「乾杯！」

福岡支部

今年度、永年にわたり福岡支部を支えてくださった高嶋紀子さんから、原　誠子さんへと事務局長をバトンタッチされました。高嶋さんには同窓会本部より、感謝状が贈呈されました。

福岡支部
旧事務局長
高嶋紀子さん

福岡支部
新事務局長
原　誠子さん

平成二十年度高鍋高校ＯＢ祭のお礼

平成二十年度高鍋高校ＯＢ祭実行委員長　**染山昌幸**

本年度の高鍋高校ＯＢ祭は『出会い～そして　永遠の友情へ』をテーマに、私達昭和六十年卒業同窓生（三十七回生）が担当し八月十五・十六日の両日盛大に執り行うことができました。これもＯＢ祭の趣旨をご理解の上、ご支援、ご協賛いただいた皆様方のおかげだと心から感謝申し上げます。

恒例の特別記念講演では、乙武洋匡氏をお迎えし『チャレンジ精神』を演題に講演をいただくとともに、特別ゲストに桑田真澄氏をお迎えし乙武氏との特別対談を行うことができました。違う分野で活躍されているお二人のお話には、ご来場された方々もそれぞれの思いでお話を聞いていただき貴重な講演となったものと感じております。また、オープニングイベントでは母校在校生によりすばらしい舞台を演出していただきありがとうございました。私達昭和六十年卒業生も在校生と共にイベントに参加し、改めて母校との絆を深めることができました。

私達は今回のＯＢ祭を通して、母校と鳴海ヶ丘会の伝統の重さ、そして人と人の繋がりの深さ、温かさを強く感じました。

これからは、この経験を後輩達へ引継ぎ、母校や鳴海ヶ丘会、そして地域の発展に努力して参りますので、今後とも鳴海ヶ丘会及びＯＢ祭へのご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

最後に、皆様方の益々のご健勝とご活躍をご祈念申し上げお礼の言葉とさせていただきます。

なんきんはぜ

高校時代に歌った、忘れられない校歌がある。夏の甲子園予選一回戦に勝利した後に歌った校歌だ。この一勝は私達チームにとっては公式戦初勝利であり、唯一の勝利であった。嬉しさと興奮で、音程もリズムもむちゃくちゃであったが、球場中に響き渡る大きな声で歌い、サンマリンスタジアムで校歌を歌えることを誇りに思い、そして幸せに感じた。今でも、野球部の仲間と集まった時は必ず、あの時歌った校歌の話で盛り上がる。

今、式典の際に歌う、校歌や応援歌を聞くと少し寂しく思う。声も小さく、表情も硬く、何より生徒達が校歌を歌うことに誇りが持てないように映る。しかし、今年の鳴祭文化の部の最後に歌った応援歌は、元気良く、生徒の表情もとてもイキイキしており、聴いていて気持ちよかった。なにより、団長、リーダーを中心に、体育祭にかける意気込みが伝わってきた応援歌であり、結果的に、鳴祭の大成功につながったと思う。この経験を生かして、生徒達には、校歌、応援歌をもっと大切にしてほしい。

また、余談であるが、野球部の後輩達に頑張ってもらい、全校生徒一体となり肩を組んで「な～るみがおかに～」と、甲子園球場で母校の校歌を歌ってみたいものである。

（Ｍ・Ｍ）
（平成十六年度卒業生）

OB祭開催というカリキュラムを終えて

ゴルフ部部長　小山　哲也

「お前だ、間に合わんど！」そう指摘され集まった同窓会で、やっと実行委員体制が決まり、まさに夢中で駆け抜けた十三ヶ月でした。高鍋高校を卒業して、皆それぞれが違う人生を歩み、それぞれが培った経験を活かす場として課せられた高鍋高校OB祭というカリキュラムに、いつしか没頭している自分がいました。

短期決戦！これがかなった同窓生はたくさんいるのかもしれませんが、二十数年ぶりに会う同窓生たちと、関東、関西、福岡等それぞれの地でまとまりを見せ、日を追うごとに組織が活性化していくのを実感いたしました。

ゴルフ部を担当することになった私は、前年度OB祭ゴルフコンペに参加させていただきました。先輩方の颯爽と動き回る姿を見て、プレッシャーを感じつつも、負けられないとに沸き立つものを感じていました。又、得るものも多く、重要なポイントを掴んで帰ることが出来ました。

まずコンペを運営する上では女性の力が必要であると痛感し、組織づくりが非常に重要と考え、女性を中心に呼びかけ、ゴルフ部を立ち上げました。何を隠そう、在学当時に会話すらしたこともない同窓生が沢山いたのですが、数少ない知人を頼りに頭を下げて回ったのを覚えています。「ゴルフなんて全く知らないんだけど」と言いながらもゴルフ部に参加　協力してくれたみんなに今、改めて感謝しています。

こうして集まった仲間と共に準備を進めていく上で、あらゆる場面においてOBの皆様をはじめ、沢山の地元の方々の多大なるご支援、ご協力をいただき、伝統の重さ、地域との深い繋がりを体感させていただきました。この場を借りて御礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

そんなこんなで月日は流れ、実行委員会を重ねることに焦りと逸りの複雑な心境の中、やれることやったと自分に言い聞かせつつも、前夜は中々寝付く事が出来ず、当日スタッフに配布する担当業務の資料を再確認したり、おしぼりを冷やすクーラーを洗いながら夜空を見上げ、「よし！大気は大丈夫」と、ひとまず安心し、ようやく床につくことが出来ました。

いよいよ当日。OB祭の幕開けとして、ゴルフコンペでこける訳にいかず、弥が上にも力が入ります。揃いのラガーシャツを着た同窓生（緑の軍団）を目の当たりにした時の興奮を悟られぬように抑え、（汗は流のようでしたが）いざ本日担当する業務内容の説明を終え、祈るような気持ちでそれぞれの持ち場に散ってもらいました。我々に出来る最高のおもてなしの心でお迎えしたいと、駐車場の確保、冷たいおしぼりのサービス等、参加してくださる方々に少しでも快適に楽しくプレイしていただくためのこだわりは、大変好評でお褒めの言葉をいただくことができました。まだまだ行き届かぬ点も多々あったことと存じますが、心広くお許いただけ、「お疲れ様！」「苦労やったね！」の温かいねぎらいのお言葉をかけていただけた時の安堵感を忘れることはできません。

OB祭の開催というカリキュラムを通して得たもの「感謝」、「財産」、「感動」は今後の私の人生における大切な財産となりました。そしてこれからが平成二十年度高鍋高校OB祭のテーマ「出会い～そして　永遠の友情」の始まりです。これからじゃんじゃん企画していくんで、同級生！覚悟はいいやぁ！

最後になりましたが、高鍋高校教育の最終カリキュラム『OB祭』最高！

十三ヶ月を振り返って

統括副実行委員長　杉　英樹

今年のOB祭が無事終了し、この十三ヶ月を振り返ってみると、あっという間にというか、「あっ」という間もなくただバタバタと過ぎたような感じがします。

思い返せば昨年七月に開催された評議員会に、先輩からの「誰か出席しておかないと困るぞ」という声に三名で出席し、「こりゃ、えれこっちゃ」「どんげすっか」と慌てたのが始まりでした。

まずは、「人を集めんと何もでけん」ということで、その夜のうちに電話作戦開始。全体の同窓会は、高校卒業以来一度もやっていなかったので、とにかく県内にいる者を一週間で集められるだけ集めて、役員の骨格を決めよう」「そして、一ヶ月後には同窓会を開催して実行委員会を立ち上げよう」と動き始めました。

幾度かの集まりを経て役員体制がおおかた決まり、高鍋高校に挨拶に行くと、「あなた方の年代は行動が遅いよ。今までの先輩方はみんな二～三年前から同窓会をしたらして準備をしているんだよ。大丈夫？」と、きつ～いお言葉もいただきました。

いろんな行事が始まると、自分らのOB祭の段取りや打合せだけでなく、鳴海ヶ丘会の県支部総会への参加や、三役会、理事会への出席・挨拶など想像していた以上の忙しさでした。しかし、いざ、はまってしまうと面白いもので、「一生に一度」のこと、悔いの残らないよう先輩方に負けないOB祭を作り上げよう。やってやりすぎることはあっても、やらずに後悔するくらいなら、思いつく事・出来る事は、やっておこうと、どっぷり漬かっていました。

今回のOB祭をきっかけに、いろんな事をとおして、さまざまな人との出会いがありました。また懐かしい友人との再会もありました。高校在学中には一度も喋ったことのなかった同窓生とも自然と会話をするようになり、みんなで知恵を絞り、自分たちのOB祭を盛り上げようと頑張っていました。これって凄いことだと思いませんか？

この機会を与えられていなかったら、昭和六十年卒でなかったら、どうなっていたのでしょうね。このつながりは、今後もずっとずっと大切にしていきたいと思います。

今回、統括副実行委員長という大役をさせていただいたことにより、いろんな経験をすることができ、非常に大事なものを得られたように思います。また、いろんな方にご指導をいただき勉強にもなりました。ありがとうございました。

どうしようかとあたふたしていた昨年七月がついこの前のことのようです。みんなでひとつ成功に向けて頑張ったあとの言葉が、「お疲れさま」「すごかったね」「ありがとう」「・・・・」っていうのが素直な気持ちで、すべてを物語っているのだと感じました。これも昭和六十年卒の同窓生が団結し、それぞれの役割をしっかり果たすことができたからだと思います。

同窓生の一人ひとりが、「昭和六十年卒でよかった」と思ってもらうことが、実行委員、同最高の幸せであり、グリーンのラガーシャツ（今年のOB祭ユニフォーム）の背中にもプリントされていますが、自分たちの高鍋高校OB祭のテーマ「出会い～そして　永遠の友情へ」そのものであってほしいです。

先輩達が築き上げてこられた伝統ある高鍋高校OB祭、今回の経験を後輩達へ引継いでいくとともに、母校や鳴海ヶ丘会、そして地域の発展に努力して参りますので今後ともよろしくお願いいたします。

懇親会を終えて

懇親会部長　小野　文彦

「お疲れ様！」

「楽しかったですよ。」

そう言いながら、私の目の前を、来賓の皆様をはじめ、多くの先輩方がにこやかな顔で通り過ぎていかれます。そして、その両脇には、昭和六十年卒の同窓生が、訪れた多くの方々を見送るために、これまたにこやかな顔で並んでいます。その列は、会場の出入り口からホテルの玄関先まで、途切れることなく続いていました。

一年前、懇親会の役を引き受けてくれないかこと、声をかけられました。（自分にそんな仕事ができるのか、二日間に渡るOB祭の締めくくりである懇親会での失敗は許されない。）いろんな思いが頭の中を駆け巡り、時に、その重圧に押しつぶされそうになることもありました。

初めての経験でわからない事が多く、これまでの先輩の取り組みを参考にさせて頂きながら、懇親会の形が少しずつ見え始め、OB祭に向けて進んでいっているという手応えを感じました。

懇親会では、どのテーブルからも楽しそうな談笑の声が聞こえ、教え子との再会を喜ぶ恩師の姿や、会場内の至る所で笑顔で接待している同窓生の姿を見て、私の心の中には熱いものが込み上げてきました。こうして年に一度、この場所に集い、再会を喜び合う多くの先輩方の姿を見たとき、これが、高鍋高校OB祭なのだ…と強く心に感じました。

在学中は、当たり前のように歌っていた校歌や応援歌も、卒業後、このような場で改めてOBとして歌ってみると、歌詞へ込められた深い意味に気づき、感動で心が震えていました。高鍋高校の卒業生で本当によかったそう思った瞬間でした。

今年のOB祭のテーマは「出会い～そして　永遠の友情へ」でした。今回、OB祭の活動に携わることで、私は永遠の友情を手に入れたような気がします。私にこの役をえてくれた友に、私を支え、惜しみなく協力してくれた友へ、改めて感謝の気持ちを伝えたいです。

「みんな　本当にありがとう」

そして、

「これからも、永遠の友情を築いていこう」と。

最後になりましたが、高鍋高校同窓会（鳴海ヶ丘会）を始め、関係各位の皆様に改めてお礼申し上げます。

また、アトラクションにご出演いただいた高鍋高校OBの川野みなみ様、高鍋町役場職員で構成されたバンド「ポトム」の皆様に心よりお礼申し上げます。

私たちの後に続く後輩たちの一人でも多くが、OB祭活動に携わり、この素晴らしい感動を味わってくれることを願っています。

OB祭を振り返って

事務局次長　中里紀代美

「いざいざかちとらむわれの勝利」と伝統を象徴する高鍋高校応援歌が高鍋町中央公民館ホールに響き渡ります。

前日、晴天の下、ゴルフコンペも無事に終了し、私たち昭和六十年卒の同窓生は揃いのラガーシャツに袖とおし、心をひとつにいよいよ八月十六日を迎えました。

昨年七月にスタートした実行委員会のメンバーを中心に、企画、衣装、ゴルフ、広報、販売、懇親会の各部を発足し、準備、運営をしてきました。

準備の途中においては、何度も壁にぶち当たり、正直心が折れるような事もありましたが、それでも、瞬として立ち止まる事はなく、ただひたすら前へ前へと進んで参りました。

そんな中で感じたことは、高校時代には気が付かなかった「母校への想い」、故郷への想い、「友への想い」。一生に一度しかない幹事として迎えるOB祭に、多くの同窓生の想いが繋がっていくのを感じながら、こうして携われることに喜びを感じていました。

又、OB祭の成功は、OBの皆様、学校関係者、在校生、保護者の皆様、地域の皆様の多大なご支援、ご協力のお陰であると、皆様の温かさを肌で感じることが出来ました。

高鍋高校OB祭を通して得たあの感動は一生忘れることのない私の財産となり、改めてすべての方々に深く深く感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

『出会い～そして　永遠の友情へ』のテーマのごとく、OB祭をきっかけに共感できた友…これからもずっと、もっと宜しくお願いします…

「OB祭を終えて」

副実行委員長兼企画部長　山本　博

OB祭の実行委員を経験してみて（しかも企画部長という「OB祭要の大役？」）伝統の重みを感じずにはいられなかった。

一年間という長いようで大変短い時間、そして会議・交渉の繰り返しの中、皆の団結力のおかげでこの日を迎えられたことに感謝の気持ちでいっぱいである。

講演会当日は満員の入りで、校歌・応援歌を会場全員で斉唱し一気に盛上がりを見せた。順調なホールの裏では宮崎空港がオイル漏れ事故により空港を時閉鎖するという思いもよらぬ事態が発生しその対応でおおわらわであった。乙武氏・桑田氏のそんなハプニングも何のその…笑いあり感動ありの両氏の講演会にホッと胸をなでおろす一面もあった事は今となって一つの良い思い出となった。

毎年様々な苦労を経てOB祭を引き継いでこられた先輩方に改めて敬服する。そして同時にこれから後輩にも是非、この伝統を立派に受け継いでいく。終わりなき永遠の友情へ…。

「終わり良ければすべて良し！」高鍋高校生として出会い、縁があってこの伝統を引き継いでいただいた全ての方々に心から感謝します。

惜しみない協力をしていただいた方々に改めて感謝しています。本当にありがとうございました。

「みんな、ありがとう」

副実行委員長（広報・販売担当）　宮川　卓郎

「えっ桑田さんも来るのかよ！」広報活動の全体説明会を数日後に控えた四月後半の実行委員会での率直な感想だ。

テーマも決まり、協賛お礼の粗品のタオルも仕上がり、チラシの校正段階のこの時期に講師の先生が一人になるのはショックが大きい。桑田さんに罪はないのだが彼の事が大嫌いになった。乙武さんの講演チケット代二千円、広告費も去年並みといった甘い思惑が消え、『みんなでガンバル』だけが残った。川島広報部長を中心に広報部員と同窓生が多くの協賛金を集めてくれた。新聞にOB祭の広告が掲載された日、胸が熱くなった。

日高チケット販売部長を中心に、販売部員、同窓生として評議員の皆様にチケット販売を協力していただき、完売することができた。

OB祭当日、桑田真澄さんはとてもイイ人に見えた。

「OB祭を終えて」

衣装部部長　伊比井陽子

今回、OB祭のスタッフユニフォームを念願のラガーシャツにすることができて幸運でした。しかしこの幸運は、衣装部と執行部半年以上にわたる紆余曲折、試行錯誤の中から生まれたものであり、また、関係者のご協力無くしては実現できなかったものです。このOB祭に携わり、ずっと感じていたのは「信頼」と「和」でした。意見の相違があっても、最後は皆　仲間を信じる気持ちで乗り越えて来たように思います。

素晴らしい先輩方、関係者の皆様、そして素敵な仲間たちに感謝します。

来年度に向けて

平成二十一年度高鍋高校
OB祭実行委員会
実行委員長　岡田　祐二

六十一年卒業生を代表して、ご挨拶申し上げます。過去数十年に渡り、先輩諸氏並びに母校関係者のご尽力と、地域の皆様方のご支援とご厚意に支えられ受継がれて来た「OB祭」の企画運営を担うことは、計り知れぬ重圧を感じる反面、誠に光栄なことでもあると受け止めております。今年は、次年度担当者として同窓会の各種行事に参加し、先輩諸氏のご高説を拝聴出来ました事や、喝采を博した今年度のOB祭での、昭和六十年卒業生の先輩方が一致団結して運営にあたられた真摯な姿への感謝の気持ちを忘れず、同窓生との親睦を図り、「OB祭」の準備を進めてまいりますので、ご指導ご鞭撻、ご支援の程宜しくお願い申し上げます。

文化の部

実行委員長　二〇三　幸田　あや

今年の鳴祭を今までとは違ったものにしたいと実行委員会は一生懸命準備をしてきました。

成功までの道のりはとても長かったように思えますが、たくさんの人との協力もあって乗り越えることができました。

鳴祭を通して、学校全体が盛り上がる。とてつもない感動でした。

２年生合同創作「春夏秋冬」

合唱コンクール　二〇四　藤井　杏奈

全学年出場と決まったときから、私は「合唱コンクール、絶対に成功させてやる!!」と自分自身の中で決心しました。

強く意気込んだものの最初は何も分からず、不安でいっぱいでしたが、当日は学年なんて関係ないくらい、どのクラスの歌も上手でホール中に響いていました。

合唱コンクールを通して、あらためてみんなで歌うことの楽しさに気づくことができました。

来年は今年よりももっとすばらしい合唱コンクールになるといいです。

最優秀クラスに輝いた302

ファッションショー　三〇七　山口麻衣子

ショーを成功させるために、私たちは十ヶ月前から衣装やドレスを作ってきました。たくさん大変なことがありましたが、みなさんのおかげで無事成功させることができました。ご協力頂いた校長先生・先生方・各団長さん、ありがとうございました。

体育の部

黄団団長　三〇一　新名　頌平

良い団長とは決して言えなかったのですが、体育祭でみんなが一つになり最高なものにでき、一生忘れることのできない思い出ができたのでみんなに感謝しています。

青団団長　三〇一　小原　拓也

体育祭が終わって、みんなから楽しかったと言われて、団長の本当の仕事というのが分かった気がした。良い体験ができたと思う。最高の「小原ンピック」でした。

赤団団長　三〇六　長友　翔平

今回の体育の部の団長をやらせてもらい、二百人以上の先頭に立ってまとめる難しさを感じた。同時に全体を通して自分が一番支えられていたことも実感した。本当に大変だったが「団長」という役が出来て良かったと思う。

7月29日 オープンスクール 450名　参加

高校の授業を直接受講する「体験授業」や出身中学の先輩が説明する「中学校別説明会」があり、参加した中学生や保護者の方に大好評でした。

また、「部活動体験」もあり、多くの生徒が参加したり、見学をして楽しんでいました。

県新人大会

野球部　ベスト四

一年生大会

ホッケー部　優勝

ラグビー部　七人制　優勝

空手道部
男子体形　団体　三位
男子組手　団体　二位
女子体形　団体　二位
女子組手　団体　三位
男子個人　第三位　白井　奏介

バドミントン
シングル三位　梅田　晋之介

文化部

吹奏楽部
県吹奏楽コンクール　銀賞

書道部
朝日学生書道展
県教育長賞　橋口　真子
県教育長賞　河野　仁美

独唱・独奏コンクール
木管楽器部門
銀賞　有田　奈緒